

J U A A 選書「大学評価を読む」

丹保憲仁・大南正瑛編

エイデル研究所、2001年、4,400円(404ページ)



大学基準協会が戦後間もなく設立されてから半世紀以上、平成3年の「大学審議会答申」(大学教育の改善)により、設置基準の大綱化が謳われ、自己点検・評価の努力義務が制度化されて10年の歳月が経過し、「大学評価」自体大きな曲がり角に達し、それと共に大学基準協会自身のあり方も厳しく問われる時代が到来している。

本書は、本誌「じゅあ」No.25、26号等で編者が公表している「大学評価の新しい地平を切り拓く(提言)」と「新構想の大学評価に関するアクション・プラン」を軸に、第1部「大学基準協会と大学評価 その今後の役割」、第2部「大学第三者評価の課題 平成11年の本協会のアンケート調査結果を踏まえて」、さらに、それらの資料篇から構成され、執筆者もそれぞれの分野に造詣と経験の深い人々を配し、協会の組織と役割の根元を問い、文字通り「大学評価の新たな地平を切り拓く」意欲的な企画であり、できるだけ多くの方々に一読をお薦めする好著である。

第1部の最初に「いま大学基準協会は新しく脱皮する好機」「いまグローバルな『評価の時代』の契機を把握する」(大南正瑛氏)と訴えるように、片や文部科学省により大学評価・学位授与機構が国立大学を対象に設けられ、一方で総務省レベルでの「政策評価」の方針も出され、諸外国での事情も進展し、わが国の大学基準協会、そして大学評価のあり方への再考なしには済まされない事態に直面していることを痛感させられる。

第2部「大学第三者評価の課題」は、まさに焦眉の問題を協会の真骨頂を示す専門委員による加盟校対象のアンケート分析を行い、統計的結果を多角的に検討し、これまた看過できない幾つかの注目すべき点を指摘している。例えば、「大学外の研究機関の研究者や社会的有識者も評価者に加えるべきだ」「専門分野別に見た第三者評価の経験の有無」「第三者評価に伴う改善点」等は、議論的となるろう。

本文中でも指摘のある「異議申立審査会」、さらに「財政評価分科会」の新設と財政基盤の確立の問題等も協会の内外、国家社会全体で取り組むべき課題であろう。

(堀江宗生・東海大学教授)

『大学という病』

竹内 洋著

中央公論新社、2001年、1,800円(294ページ)



このところ大学にとってあまり喜べない本に話題が集まっている。立花隆『東大生はバカになったか』(2001年)に代表される大学生の学力低下や「～のできない大学生」、「教授が変われば大学が変わる」といった類の書である。避けば鷺田小弥太著『大学教授になる方法』(1991年)あたりが今の先駆とすれば、日本が「失われた10年」にまさに入らんとする頃か。

本書の大部分を占めるのは、大学の病理や不快が取りざたされ、大学改革が言われている「いま」を取り扱っているわけではない。大学不信が大きな潮流となった昭和初期の東京帝国大学経済学部の派閥抗争に翻弄される教授たちを描いているのである。若き日の河合栄治郎、大内兵衛、矢内原忠雄そして丸山眞男といった面々が次から次へ登場する。ファッションブルなモダンボーイである経済学部助教授、大森義太郎(1898-1940)を主人公に東京帝国「大学崩壊」のドラマが延々と展開される。筋立ても「大学版忠臣蔵」的、ドラマティックな仕立てなのでおもしろいが、消費される教授(第4章)大学の授業はつまらない、講義は休講だらけ(第2章 黄色いノートと退屈な授業)といったところはいま読んで古さを感じさせない。

しかし、著者がもっとも言わんとするところは第10章「大学は死んでいた」ではないだろうか。大学神話を揺るがしたのは、国家主義が表舞台に登場し始めたこと、ジャーナリズムという新たな知の場の発達そしてマルクス主義者を中心とした大学攻撃とアカデミック・スキャンダルをあげている。最近亡くなった仏人社会学者のピエール・ブルデューがしばしば引用されているところなどは興味深い。昭和3年から始まる大学をめぐる詳細な分析と考察から、いずれ大学院紛争が10年以内に起こるのでないかと予言している。それが紛争なのか改革なのか、あるいは再構築なのか、言い方の違いはあるにしても、大学知と大学人の内部的消費にとどまることが続くならば、大いなる浪費につながるのではないかと、一方で危惧している。

いずれにしても、大学を舞台にした劇に終わりはないさそう。かりに幕引きがあっても、それが大学の病が完治できたとは思わないほうがいいのかも知れない。

(鈴木雄雅・上智大学教授)